京都大学経済学部同窓会会報

京都大学経済学部同窓会　〒606-8501　京都市左京区吉田本町　京都大学経済学部内

ご挨拶

京都大学経済学部同窓会会長
近畿日本鉄道株式会社　相談役
辻井昭雄

私は、昨年平成十八年十一月二十五日の京都大学経済学部の同窓会総会におきまして、中村前会長の後任として推薦され、同窓会会長に就任いたしました。甚だ微力ではございますが、皆様方のご助力を得て、経済学部の発展、同窓生の親睦交流に力を尽してまいりたいと存じますので、どうかよろしくご支援の程お願い申し上げます。

さて振り返りますと、私は昭和三十一年に経済学部を卒業し、近鉄に奉職して爾来五十年余になりました。その間、人生後ろを振り返らない主義で歩いてきましたので、大学や同窓会活動とは、殆ど無縁に過ごしてまいりました。転機は、平成十四年十月に、大阪支部の支部長を住友生命の浦上さんから引き継いだことであります。それからは、毎年の大阪支部総会、理事会を催行するなどして、大阪支部の活動に携ってまいりました。本学の先生方を講師にお招きして、時宜に沿ったテーマでの講演の後、OBや先生方と一堂に会しての懇親会をガスビル食堂で賑やかに開催しました。これは、支部として恒例の行事であり、常連のOB各位には、いつも楽しい時間を過ごして頂いたと思っております。更に、大阪支部長の故をもって、翌年の同窓会総会で副会長を拝命いたしておりましたところ、この度思いがけず同窓会会長を仰せつかった次第です。私が会長に就任いたしました総会には、前会長の中村さんが、わざわざ東京からお出ましになり、それも車椅子で奥様とご一緒でした。中村さんの同窓会活動に対する熱意に接し、心からの感動を憶えるとともに、改めて感謝申し上げる次第です。

言うまでもなく、社会人としてバランスのとれた人間になるためには、普段付き合っている仕事仲間だけでなく、異業種、異文化、異世代の人達と接点を持つことが大切であります。その意味で同窓会の総会や懇親会に出ますと様々な企業のビジネスマン、大学の研究者、会計士、悠悠自適の人など肌合いや価値観の違う人達と知り合い、親睦を深めることができます。これが自らの視野を広げるのに有益であることを実感いたしました。それに歳をとりますと、やはり過去を懐かしむ気分にひたることも人生を豊かに過ごすために大切かと考えるようになりました。多岐にわたる交遊も「必要な無駄」といえるのではないでしょうか。そういった意味合いからも、同窓会で与えられた役目は、私にとりまして有難い、得がたい機会であると認識しております。同窓生の皆様も、各種会合に積極的にご参加賜りますようお願いいたします。

昨年八月、更に大学との絆が深まることになりました。といいますのは、「財団法人京都大学教育研究振興財団」の会長を、大阪ガスの大西正文さんから引き継ぐことになったのです。そもそもこの財団は、京都大学と海外との国際交流、教育・学術研究活動の促進等へ必要な援助を実施するために、京都大学創立七十周年事業の一つとして昭和四十九年に設立されたものであります。その後事業を拡充発展させ、平成六年から数年間に亘って「京都大学百周年記念事業募金」として、多くの企業や団体、個人から浄財を集め、「時計台記念館の建設」はじめ各種の記念事業に要する資金を助成しました。併せて三十数億円の基本財産、事業資金を原資として、毎年一億円規模の助成事業を長期安定して実施しているのであります。当時募金のため大変ご尽力を頂いた経済界の先輩や大学の先生方に深甚の謝意を表したいと思います。これからは財団の責任者としての立場を踏まえて、財団のPRと活動内容を関係の皆様にご理解頂き、協力を得られるよう努めてまいりたいと思っておりますので、どうか同窓会の皆様におかれましても、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

現在、大学をはじめとする教育界を取り巻く環境は、大きな変革の中にあります。政治経済を含めた社会のあり方が変貌する中で、大学の在り様についても再度模索されているように感じております。かつて大学は「象牙の塔」と呼ばれ社会と隔絶した存在でありました。今は教育と研究という大学本来の仕事の他、国立大学法人として大学のマネージメントを確りと推進し、収支均衡を図らねばなりません。大学への進学率も高まり、大学教育が目指す人材像に対する世間の期待が高まっております。高度の知識や技術のほか、倫理観、道徳観を有し、世のため人のために尽くすという高い志をもって様々な場面で社会を指導する真のリーダーの育成が社会から切望されております。私の五十年余りのビジネス経験でも、優れた知識技能を有する社員は必要とされますが、それだけでは不十分です。志や使命感を持たない人間はリーダーにはなれません。自ら国や社会、自らの属する会社、集団のために、進んで汗をかく、貢献できる人間を育てなければなりません。振り返ってみますと、私自身は四十歳前後、管理職の任にあったときに、仕事の必要性からユング心理学を勉強しました。部下がこの上司のためならと進んで仕事に励むためには、先ず、部下の立場に立って仕事上の悩みを聞いてあげることが不可欠だからであります。そこで学んだことは、自分の立場、思考だけで判断するのではなく、相手の立場に立って対話し、ひたすら聞くことに徹する。それによって相互理解が深まるのです。これが人材を活かす道だと考えております。大学教育に求めることは、知識技術のトップリーダー育成だけでなく、人格や精神の在り方を含めた全人的なものであり、「品格あるリーダー」育成を切望するものであります。そのためにも、同窓会の立場から積極的に支援をしてまいりたいと前向きに考えております。

最後になりましたが、京都大学経済学部の同窓会会長という、得がたいお役を頂戴したことに対しまして、改めて感謝申し上げますとともに、同窓会活動を通じて、京都大学および経済学部の活動を大いに支援し、併せて同窓会活動を積極的に実施し、相互の親睦を図り、大学の隆昌、同窓生間の交流の活発化に努めて参りたいと存じます。どうか同窓生の皆様方におかれましても、ご支援ご協力賜りますよう、切にお願い申し上げて、甚だ簡単粗辞ではございますが、就任のご挨拶を申し述べます。

同窓会総会のご案内

平成19年度経済学部同窓会総会を下記の日時に開催いたしますので、何かとご多用のことと思いますが、会員諸氏お誘いあわせのうえご出席賜りますようご案内申し上げます。詳細につきましては、同封のご案内状を御参照下さい。

記

日　時　　平成19年10月20日（土）15時～19時
場　所　　京都大学百周年時計台記念館

◇

会費納入のお願い

平成19年度（19年4月～20年3月）の同窓会年会費5,000円を同封の振替用紙で、納入下さいますようお願い申し上げます。

なお、平成17年10月発行の「卒業生名簿」をご入用の方は、同窓会年会費を払込み下さいますようお願いいたします。

京都大学経済学部同窓会事務局
住所：〒606－8501　京都市左京区吉田本町
ＴＥＬ　075－753－3419　ＦＡＸ　075－753－3490

なお、ご住所変更の折は、お知らせ下さいますようお願いいたします。

ごあいさつ

―経済学部の近況―

京都大学経済学部同窓会理事長
大学院経済学研究科長・経済学部長
森　棟　公　夫

学部長になって一年を過ぎましたが、近況を紹介したいと思います。最初に、卒業された方々から時々聞かれる用語の説明をします。経済学研究科は経済学部の上にある大学院を意味します。一九九七年に行った大学院重点化という施策のため、現在では学部ではなく研究科が表看板になっており、学部のほうが大学院に附属する組織に変わっています。そのため、テレビに出てくる先生達も、京都大学大学院教授という肩書きになっています。しかし、こういうことはあまり重要ではなく、経済学部で何の問題もありません。私の名刺の肩書きは、京都大学経済学研究科長、経済学部長ですが、この同窓会では経済学部長です。教員の呼称も変わり、助教授が准教授になり、助手は事務的な職務の場合は助手のままですが、研究を主に行う者は助教と呼ばれるようになりました。

昨年四月に経営管理専門職大学院が発足しました。この為、経営系の先生方の多くが専門職大学院と従来からの経済学研究科の両方で教育を行うことになり、用務が倍増しました。学部の教育負担はもちろん変わりません。ただし、組織的に経営管理専門職大学院と経済学研究科は全く別で、予算も別立てです。しかし、経営管理の卒業生は、希望すればこの同窓会に入ることが可能であるとしました。経営管理が昨年四月から始まったとはいえ、教室などの整備は昨年度一年かけて旧工学部四号館で進められてきました。設置が決まってから教室などの工事を始めるのが文科省のやり方です。教室はこの春休み中にやっと完成し、新年度はあたらしい教室で授業が始まりました。

経済学部も三階にある三一一教室が整備されました。パイプ机から新しい固定式の机と椅子になり、標準に達したというところです。実は年度末に本部より予算が出て、春休み中に法経二と五番教室、いくつかの演習室の整備を行うことができました。演習室のパイプ机も無くなりました。スピーカ、プロジェクターも改善され、無線lanも一部準備されました。こういった補助が大学から出るようになったのは法人化のメリットです。教室といえば、演習室にセキュリティーの為の小窓を付けました。授業の一部は東京からの遠隔講義で行っています。インターネットで繋いで、モニターの中で先生が話をする講義です。この遠隔講義、我々が貰っている二十一世紀ＣＯＥ研究費で借りている東京オフィスで行っています。今年の秋からは、東京駅構内にある京大オフィスに移動します。

独立行政法人化後の予算カットのため、各研究科、学部は外部に資金を求めることが非常に大きな意味を持つようになってきました。経済学部では常勤の他に非常勤の職員が二十名くらい居て業務を支えています。この非常勤職員の給与も外部資金で払っているケースが増えています。外部資金と言えば、文科省がスポンサーである二十一世紀ＣＯＥ等の競争的研究費だけではなく大和証券から寄付講義を頂いています。寄付講義は、寄付金を資源として先生を雇用し、授業を行います。また、昨年度は、みずほファイナンシャルグループから、寄付講義という名目で寄付金を三年間の約束で頂きました。寄付講義は、先生は雇用しませんが講義を行い、寄付金は学部の教育などの為使わしていただけるというものです。シャープ株式会社からは、中国人留学生に対する奨学金を年間四名分頂きました。経済学部には大学院を含め中国人留学生が百二十名くらい居ますから、ありがたい話です。他には、昭和二十二年卒業の林信太郎氏から、日本の通産政策に関する資料をダンボールで百五十箱程いただきました。日本の戦後史の研究にとって重要なものですが、整理には予算手当が必要で少し時間がかかります。

学部長として同窓会の集まりにはいろいろ参加していますが、五月十六日に昭和三十二年卒業の先輩方が、時計台の国際ホールで卒業五十周年記念の同窓会を開かれました。同年に卒業された方は二百六十人ほどいらっしゃるそうですが、当日の参加者は奥様方も含め一〇〇名程に達しました。皆様、大学時代のお話が尽きない様子でした。京都大学に久しぶりに来られた方々は、時計台や会場である国際ホールに代表されるような新しい建物を見学され、きれいになったことに驚かれておられました。同窓の皆様にご案内しますが、五十年記念に限らず、一〇〇名ほど集まるのであれば時計台の国際ホールは場所として理想的です。是非ともご利用下さい。ただし予約はかなり難しいと聞いております。

近況報告

”源流への旅“

京都大学名誉教授
古川　顯
（平成十八退官）

昨年京都大学を定年で退職し、現在は甲南大学経済学部に勤務しています。京大時代は通勤に片道二時間二〇分もかかっていましたが、今は大学の所在地が住まいと同じ神戸市ですので、所要時間が大幅に減り助かっています。また一昨年の尼崎でのＪＲ事故に遭遇して九死に一生を得た私にとっては、ＪＲを利用することなく勤務地に行くことができるのも有り難いことです。

京大時代と比べてかなり時間的余裕ができましたので、いろいろなことに挑戦し続けています。例えば、今年の三月末には、しばらく途絶えていた四国遍路を再開し、高知県西部の四つの寺を歩いて回ってきました。四国遍路は現在二周目なのですが、二周目も残り約十カ寺を残すのみとなりました。歩いて回ることを基本にしていますので、二周目を回り終えるにはまだ少し時間がかかりますが、年内には「満願」を達成したいものです。

また暇を見つけては、相も変わらず、温泉行脚を続けています。有馬温泉が自宅と同じ神戸市北区にあり、また大学への通勤の途中にあるといった関係で、二週間に一度くらいのペースで有馬に通っています。いわゆる秘湯の類にも熱心に挑戦しています。この四月には、朝起きて急にＪＲ飯田線を完乗することを思い立ち、無理矢理、我が家のボスの許可をとって出かけたのですが、この時は南アルプスの山麓に湧く秘湯、鹿塩（かしお）温泉に滞在しました。なぜこんな山中に海水よりも塩分の濃い温泉が湧出するのか、現在でもよく分かっていないそうです。この他に京大退職後に行った秘湯と言えば、西表島温泉、甑島温泉がありますが、六月には長崎県壱岐の湯ノ本温泉に行くことを計画しています。これらはいずれも「秘島の秘湯」であり、あと一つ、北海道奥尻島にある神威脇温泉を制覇すれば、私の「秘島の秘湯」めぐりは、ほぼ完遂ということになります。

三年前に脳梗塞で倒れたことから、一週間に二度ほどスポーツクラブに出かけてエアロビクスや水泳などに励んだり、野菜作りに精を出すなど、健康維持にも気を使っています。さらに、学部当時に京大俳句会に属していた関係で、長い間休んでいた作句活動も最近再開しています。このような近況ですので、結構忙しい毎日を過ごしている次第です。

しかし、私がいま最も忙しいのはお勉強であります。私の専門は金融論ですが、このところ経済学史の世界にも足を踏み入れ、貨幣・信用理論の歴史について猛勉強しています。現在、十九世紀半ばのイギリスにおける銀行学派と通貨学派の大論争、いわゆる通貨論争についての文献に取り組み、年内には論文としてまとめたいと考えています。その次には、ヒュームやＪ・ステュアート、アダム・スミスなど重商主義以降の貨幣・信用理論を取りあげる予定です。このように、今後は貨幣・信用理論の揺籃期にさかのぼる「源流への旅」を続けるつもりです。私は経済学史の分野はまだまだ素人ですが、現在に至るまでの経済・金融理論の歴史をたどり、しかも現代の標準的な理論から判断して、すぐれた先達の理論をどのように評価するかといった作業は、皆無に近いように思われてなりません。そういう意味では、経済学史の世界は今なお未開の荒野であり、開拓の余地がいくらでもあると私は考えています。この歳になってようやく、勉強することが楽しくなっています。生涯現役であり続け、「貨幣の哲学」を究めるべく、源流への旅を続けることができればと念願するこの頃です。

卒業生だより

”永平寺町にいます“

京都大学名誉教授
本山美彦（平成十八退官）

転地効果というものは、本当にあるのですね。これまでの人生でもっとも楽しい生活を福井の地でおくっています。

広々とした田園地帯。快適な生活。豪快な九頭竜川の流れ、とてつもなく広い河幅、優美な鳴鹿（なるが）大堰。こんな美しい公園もあるのかと感激することしきりのグリーン・センター。今年の桜はとくにすごかった。いろいろの種類の桜が咲き乱れ、一か月以上も楽しませてくれた。先日は、カッコーの声を聴いた。私には初めての声。この公園が、私の早朝ジョギング・コース。

いまは、見渡すかぎりの麦。まさに白秋。かぎりなく白に近い黄ばんだ大麦。秋には、真っ白い蕎麦の花に息を飲んだ。もうじき、蛍が出る。宿舎の前に、細い用水路があるのだが、そこで、一条に連なった蛍の光。蛍が、わが肩に留まってくれる。この地の蛍の光の点滅速度は、京都の哲学の道の蛍よりも速い。

早朝、永平寺の読経を聴きに行く。腹の底から這い上がってくる低い声のハーモニー、清涼な雰囲気に陶然となる。そのまま温泉に行く。

張り巡らされている用水路。注水と排水の水路に分かれている。この地にくるまで、それすら私は知らなかった。それは農地の息吹。まるで、血管そのもの。動脈、静脈、毛細血管、まさに芸術作品。

大学のキャンパスもまた抜群。宇宙センターを模した、広大な芝生に囲まれた白亜の建物。雪国なので、すべての場所に廊下だけで行ける。永平寺の渡り廊下を思わせる。キャンパスは二十四時間開放されている。深夜にコピーができ、深夜に本を閲覧できる。少なくとも日本では抜群の景観を誇れるキャンパスである。

神戸から往復五時間もかけて京大に通っていたことを思えば夢のような生活。徒歩で通える職住接近の快適さといったらない。早朝から深夜まで、研究室で研究できる。食事をしに宿舎に帰り、また大学に行く。帰路、街灯のない農道。真っ暗。懐中電灯をもち、めかり時の蛙の騒がしさにうっとりとする。

念願であった「宗教社会学」を勉強しています。昨年は米国のメガ・チャーチ、今年初めは琉球の神を調べました。そしていまは、白山信仰、神仏習合を学んでいます。

飲みに行こうにも、福井駅にまで行かねばならない。しかも、帰宅のバスの最終時間は、なんと午後六時二〇分、タクシーは片道三千五百円。とてもじゃないが、飲みに行くことは不可能。結局、ひたすら勉強するだけ。お陰で、健康、そして、論文だけはたくさん書いています。経済学では、J・S・ミルにこっています。今年中には『金融の倫理』を発刊するつもりです。ジャーナリスティックな本は昨年と今年で一冊ずつ出しました。

「消された伝統の復権、福井日記」というブログを書いています。一度、私のブログにお立ち寄り下さい。皆様のご健康を祈っています。

サラリーマン人生四十年

榮谷善明（昭四十四卒）

還暦を迎えたサラリーマンの私の机の上の電話が鳴り、京大勤務の旧友から執筆依頼があった。

その旧友と机を並べて学んだ頃は、為替レートが一ドル三六〇円に固定されていた時代で、人気就職先は金融機関や輸出関連産業だった。

そして、外航海運会社の一つA海運に入社し、七年目にしてニューヨーク支店に赴任。当時は、未だ外貨の持ち出し制限があり、パスポートには携行する米ドルの額が記入されていた。一ドル二九〇円から二四〇円へと一年の間に急激な円高が進んでいたものの、日本からの輸出は減ることは無く、日米貿易摩擦の解消が政治課題だった。

米国に到着してみると、ベトナム戦争に負けた後遺症から治安は最悪で、銃による殺人事件が毎日発生するニューヨークから脱出する大企業が相次いでいた。米国滞在中の最大の出来事の一つは、イラン革命を発端とした第二次石油ショックだろう。生活必需品のガソリンは、価格が高騰しただけでなく、ナンバープレートが偶数の場合は偶数日にしか購入できないといった販売制限まであり、自宅からハドソン河を渡ってあのワールド・トレード・センターにあるオフィスまでの通勤は同僚とカーシェアリングをして凌いだ。

それでも、個人生活は社会情勢とは別で「住めば都」、ミュージカル、ゴルフなどの文化・スポーツ、それに子供が学齢期前だったので家族旅行も楽しんだ。仕事の面でも、多数の米国人に囲まれ、落胆と屈辱、喜びと興奮を同時に経験しながら、ホンダ社が建設中の二輪車工場など米国各地に散在する顧客を訪問し、商売を伸ばしていく達成感も味わうことができた。

入社二十年目に再び海外へ。A海運が買収したオランダ南部の物流会社W社へ株主代表として赴任。円高は一ドル一四〇円迄進行しており、バブル景気に酔った日本企業による海外企業の買収が盛んだった頃だ。オランダは欧州大陸では数少ない英語の通じる国だが、地方都市では事情が違っており、社員三〇〇名のW社の役員、部長クラスでさえオランダ語しか話せない者が多数派だった。

それにも増して驚いたのは、オランダ人の一部が持っている対日感情。オランダは江戸時代から一貫して友好国であったという私の歴史認識が間違っていたのだが、日本は第二次世界大戦時インドネシアで戦った敵であり、オランダを蹂躙したドイツの味方だったので嫌いだよと口にする人に出会ったのは、企業相手のビジネスの世界ではまず経験できないことだった。

オランダに帯同した娘二人は、フィリップス電機の海外要員家族の為に運営されているインターナショナルスクールに入学し、そこの生徒の多くはオランダで何年か過ごした後、また海外に赴任する父親に連れられて学舎を去っていくという現実に学んだことも多かったようだ。

そして、A海運に入社してから三十九年、A海運の子会社Tタンカーの役員に就任してから六年。気がつけば、両親は八十歳代半ばに達しており、そろそろ都会の喧騒から離れて故郷に戻るべき時かと思う。

と、ここまで書いたところで机の上の電話が鳴った。A海運の副社長から、グループ内転勤の内示があり、次の職場は関西に本社のある子会社A海事の社長とのこと。身に付いたサラリーマンの習性で、早速大阪転勤の準備に取り掛かった。

小鼓に立つ夕風や花卯木
よしあき

錦おりなす全国各地の風土を訪ねて

入江貴裕（平三卒）

あっという間に卒業から十六年が経ち四十歳になりました。在学中は植田ゼミに所属しましたが、先生もまだ三十代で、ふと気が付けば今は年齢では当時の先生を超えています。この間、世の中も激動の十余年だったと思うのですが、先生方や卒業生の皆様におかれては、公私ともに充実した日々をお過ごしのことと存じます。またこの場をお借りして、皆様の今後の一層のご健勝とご活躍をお祈り致します。

幼い頃から親の転勤に伴い全国各地に住み、京都に住んだ学生時代が人生二度目の関西居住、東京の銀行に就職したのが三度目の東京居住、その後は二回の支店勤務を経て、通算五度目の東京在住中です。このため今回は地方ネタを絡めてお話をした

いと存じます。

就職後の最初の支店勤務（入行三年目、平成五～八年）は大阪でした。卒業して日が浅く、友人や職場の同僚らと「ル・フジタ」や「天天有」など京都の馴染みの店を繰り返し訪れました。なお関空開港など関西に大型プロジェクトが集中した時期だったので、関連も含め民間の資金需要は旺盛、銀行勤めとしては多忙な毎日でしたが、休日は一人の住民や顧客の立場で各所に出掛け、愛着ある関西の「変化」を個人としても楽しむ日々でした。

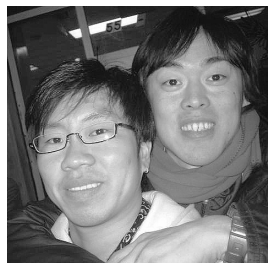
二度目の地方勤務（平成十三～十五年）は大分でした。金融環境が悪化する中、私もある倒産処理の事案の関係者になり、ローカルな事情を忖度して地場産業（観光）の再生に繋げるか、又は全国一律のルール（倒産法制）を平等かつ厳格に適用すべきかの間で、毎日が板挟みの苦しい日々を過ごしていました。しかし「地域」を起点に金融や経済を考え、悩みぬいたことが勉強になりました。また土日を活用し別府の温泉を探検、「温泉道十二段、名人」なる栄ある称号も獲得しました。

今は旅行等の際、出来るだけ車や電車を降り、足下に目線を合わせ、土地柄の中の「未知」の発見に努めています。片道二十五時間かけ海水浴に行った小笠原では、百年以上前に初めて定住した米国人N・セボレー氏の子孫と遭遇、幕末のペリー提督や咸臨丸にまつわる逸話、米国のブッシュ元大統領が自身の思い出の地として島を訪れた話など、学校で習わない別の日本史を知り、改めてこの国を「裸眼で見るような」思いでした。

情報化が進み、かつ環境や福祉がキーワードになる現代は、多様な個性が共存する虹色の社会であり、拡がりをもつ地域性も切り口の一つだと感じています。所謂「平成の大合併」を経て、全国の市町村数は千八百余になりましたが、うち既に七百程を訪ねました。これから全部とは言わないまでも、出来る限り多くを訪ねたいと考えています。

Making the Road & Growing Up

浜田毅士（平十四卒）



留学時代の友人と（右側が本人）

二〇〇二年三月に卒業し、五年が経ったが、この五年間はかなり激しく動いた五年間だった。住所は卒業後、京都から神奈川県藤沢の実家に戻り、三ヶ月ほどで異動にともない静岡県裾野へ引っ越し。三年住んだ後、退職に伴い、藤沢に戻り、その後、留学のため米国フィラデルフィアに一年半、そして、今は再就職し、横浜に住んでいる。数えてみると、五年で六回も引越ししていた。

卒業後、キャノンに就職したが、最近の若者よろしく、三年で退社し、米国のペンシルバニア大大学院へ進学した。都市開発や環境政策などについて、学部時代では考えられないほどの猛勉強を敢行し、一年半で修了。今は日本経団連で働いている今、卒業後の人生を文字にして驚いたが、大学卒業時、こんな人生を予想しただろうか。今改めて「自分で人生の道作る」と思ったが、よほど目的意識を持っていない限り、忙しい日々のなかでは、忘れがちなことでもある。実際、私も忘れていたが、この原稿を書きながら、思い出した次第である。

元々、三年で会社を辞めるという考えはなかったが、いつでも動けるよう気持は身軽に構えていたし、貯金もしていた。そして、社会人二年目が終了した頃、猛烈にチャレンジ心というか、枠から飛び出したい気持に駆られ、「海外で勝負したい」とアメリカ留学を決意した。キヤノンでは仕事、待遇、何より人間関係に恵まれていたが、深く考えずに決めてしまう性格もあり、また、「仮に失敗しても二十代で再チャレンジできる」とあっさりと決断した。ちょっと考えが浅すぎたとも思うが二十五歳の当時においてしか沸きあがらなかった気持を大事にして良かったと思う。

二度目の就職活動は一度目同様、困難の連続で、上手くいかなかったが、小さなこだわりは捨て、次に決まった所に行こうと開き直ったら、最初に決まったのが経団連だった。前職のキヤノンの御手洗会長が経団連会長をやっていることも縁かなと感じた（勿論、面識もないし話したこともないが）。

今は経団連で農政問題に取組んでいる。経済界の司令塔とも言われる経団連で農業問題とは何とも不思議な感じがするが、天邪鬼な自分には合っていると思うし、最近、WTOやEPAといった単語が新聞紙上を賑わしているように、タイムリーな話題なだけに非常に面白い。大学院時代の専攻とは離れたが、非常に充実している。

オフの時間はゼミの後輩とちょっと冒険心が駆られる土地を訪ねたり、キヤノン時の同僚とフットサルをしている。また、学生時代から行っていたクラブイベントの開催も継続し、今では下北沢や渋谷といった都内のカルチャー発信地で開催できるまでに成長した。小生をご存知の方は相変わらずヤンチャに生きているなと思われるかもしれないが、その通り。いつまでもドキドキ、ワクワクしていられるような、そんな自分でいたいと思うし、なにより将来の自分にまだまだ期待していたい。そのためにも、最近、忘れていたが、渡米した時の「道作る」の精神を持ち続けたいと思う。

始めの一歩

本川勝啓（平十七卒）

京都大学経済学部を卒業して三年目の今秋、私はオックスフォード大学の学部課程数学専攻の二年生になります。私自身全く予想もしなかった進路を選んだ経緯と近況をここで紹介させて頂きます。

京都大学では徳賀先生の財務会計学ゼミ一期生です。ゼミで企業財務や企業分析などの分野に興味を持ち、卒業論文もこの分野に関連したテーマを選びましたが、自分でも納得のいくものは書けませんでした。ご存じの通り、この分野は現在かなり高度な数学を駆使した研究がなされており、当時の私には数式に数字を代入して使う事はできても独創的なアプリケーションを考える事は難しく、数学の知識不足を痛感したのです。この頃から、数学や統計学を学部で一から体系的に勉強したいと考え始めました。一見遠回りに見えますが、基礎的な理解を積み上げていく勉強法は私に向いていると思います。

志望校は英国では学部課程が三年間でしかも専門科目のみに専念できること、数学とともに英語力も高めたかったこと、それにカレッジ制であること等の理由からオックスフォード大学に決めました。京都大学卒業後すぐに渡英し、一年間英語と数学に集中した受験勉強を経て無事第一志望校に合格できました。同大学は、四十近くあるカレッジ（学寮）の集合体であり、その中でも私の入学したエクセターカレッジは四番目に古い（一三一四年設立!!）歴史を誇ります。イギリスの大学受験制度もなかなか興味のあるものでしたが、字数の関係で割愛し、ここではカレッジを中心とした大学生活の事を少し紹介します。

カレッジには、寮・大食堂・礼拝堂・図書館・先生の部屋・講義用の大部屋等の施設があり、私は現在カレッジ内の寮に住み、カレッジ内では週二回先生一対学生二のチュートリアルを、学部講義室では全カレッジの数学専攻生と一緒の講義を受けています。学部生が世界トップクラスの研究者の方々から直接きめ細かい指導を受けられるという「贅沢」な教育は、学部とカレッジの二重構造が可能にしているのでしょう。もちろんこれに見合うだけの学生の最大限の努力も求められます。学習以外では、二週間に一度のペースで「ポップ」と呼ばれるカジュアルなパーティーがあり、年に一度は「ボール」と呼ばれるタキシード着用のフォーマルなパーティーもあります。このような機会に不慣れな私にとっては、イギリス流の社交を学ぶ良い機会になっています。また学生の大部分は、スポーツや音楽等の文化活動の団体に所属しています。私は空手部に入部し、年一度行われるケンブリッジ大学との対抗戦の代表選手になるべく週四回のトレーニングに励んでいます。

私はまだ始めの一歩を踏み出したばかりで、勉強やスポーツそれに文化のどの面でも新しいことばかりに出会う毎日です。今は自分で選んだこの道で精一杯努力し、いつか少しでも世界に足跡を残せるような論文を書けるようになりたいと考えています。

私の研究

京都大学大学院経済学研究科　教授
下谷政弘

いろんなことを手掛けてきたようでいて、振り返ってみれば長年の間、ずっと同じことをしてきたような心地もする。

修士論文では、大企業の「生産単位」論の見地から当時の日本の石油化学コンビナートの構造を分析した。大学院時代には全国のほとんどのコンビナートを見て回った。さらに、その生産手段としての「装置工業論」を勉強した。当時はいわゆる技術論論争がさかんで、私の書いた論文も「下谷装置論」としてそれに加えられた。その後、戦前日本の化学工業の具体的な歴史に関心をもちはじめ、先行する文献を勉強してみた。しかし、それらの多くは技術史の観点から俯瞰した概説書にすぎないものばかりで飽き足らず、自ら主要な化学企業の発展に沿った歴史を書きはじめた。資料を蒐集するために多くの企業現場を訪れた。実際にいくつかの企業を取り上げてみたが、そのなかで、とくに日本窒素肥料（現在のチッソ）にぶつかったことが、その後の私の研究の展開にとって幸いだった。

もとより化学工業は一つの産業範疇になかなか収まらない性格をもっている。多角化もさかんで、廃棄物の有効利用がその後の新製品を誕生させるなど、事業の範囲も漠然としており確定しにくい。そうした融通無碍で捉えにくい「化学工業」を、何とか一つの産業史として統一的に把握する手立てはないものか、と考えていた。その私なりの結論が、博士論文として書いた『日本化学工業史論』であった。日本を代表するような主要な化学企業を事業分野ごとに選択し、それらを時系列的に並べて、個々の具体的動向に即した日本化学工業史を描こうとしたのである。いわば、化学工業の産業史を、当時ようやく本格化し始めていた経営史（企業史）のスタイルで叙述しようとしたわけである。

そして、その中の一つの章として取り上げたのが、戦前において世界的なスケールで活動していた日本窒素肥料（日窒コンツェルン）であった。同社は、当時の公害問題の元凶として取り沙汰されることはあっても、その戦前史の全体像を本格的に取り上げた研究はなかった。水俣や延岡などを見て回り、戦前を知る同社のOBたちを探し出して何度もヒヤリングを重ねた。いうまでもなく、日窒コンツェルンは一九三〇年代の「新興コンツェルン」（新興の企業グループ）の代表的存在であった。勉強を重ねるなかから、いったい「コンツェルン」とは何だろうか、あるいは、新興コンツェルンに対する財閥コンツェルンの位置関係に関するいろんな疑問やヒントに遭遇することができたのである。日本の財閥に対する関心の深まりは、やがて韓国の「財閥」への興味も掻き立てることとなった。

京都大学の経済史講座の助教授として赴任してからは、第二次大戦期の戦時統制経済の状況について勉強した。当時、日本経済史の関心はようやく両大戦間期に向けられはじめていたが、時代と問題関心とを先取りする形で、そのさきに続く戦時統制経済を、あるいは戦後改革の日本経済についても、当時の院生たちと一緒に熾烈な議論を展開しながら勉強した。その際、マクロ的な経済史と併せて、ミクロ的な経営史の観点からもそれらを取り上げることにつとめた。

日本経済の一九三〇年代論や戦時統制経済、あるいは財閥や新興コンツェルンなどを勉強する時代がすぎて、所属する講座を経済史から日本経済論へと移籍したころから、これまでの新興コンツェルン論をさらに展開して、現代日本の「企業グループ論」について議論しはじめた。

よく知られているように、大企業はその傘下に多数の子会社を擁している。一〇〇〇社を超える子会社をもつ大企業さえある。しかも、それらの大半は本体から分社化されたもので占められている。これまでの親会社だけを対象としてきた「企業論」から子会社を含めた「企業グループ論」に視点を移す必要性について、いろんな論文を書いたとえば、関西にいてすぐに目に入る企業グループは松下電器グループであった。しかし、その頃には、この興味深い企業についての本格的な研究はほとんどなかった。同社の社史室へは何度通ったことだろうか。さらに、松下をやれば事業部制や分権的組織の勉強を避けては通れず、しだいに企業の組織構造をめぐる問題は私の最大の関心事にもなっていった。また、企業グループを勉強しはじめると、今度はその外側の下請会社や協力会にも関心は広まった。さらに、企業グループの頂点に立つ親会社とは、同時に事業兼営の「持株会社」でもあった。折しも当時の持株会社の解禁をめぐる議論の嵐のなかで、公正取引委員会の仕事に関係することとなり、今日まで持株会社についてもいろんな論文を書く仕儀ともなったのである。

以上のように、化学工業を最初に手掛けたことによって、重要問題でまだ誰も手掛けていなかったオリジナルな分野を次々と発掘することができたような気がする。当初に手掛けた化学工業の研究が、その後に「芋づる式」に多角的に展開してきたというわけである。いろんなことを手掛けてきたようでいて、ずっと同じことをしてきたような心地がするのも当然だったのかも知れない。

出版案内

『日本企業のネットワークと信頼』

有斐閣　二〇〇六年

京都大学大学院経済学研究科　准教授
若林直樹

日本的な企業間の取引関係は、一九九〇年代以降、脱系列化の動きに見られるように大きく変化した。この日本的企業間関係の転換は、そこにおける人的ネットワークの構造転換を通じて、従来の信頼と協力のあり方すなわちガバナンスを変えつつある。本書は〈ネットワーク〉をコアにした経済社会学的な視点から現代日本の企業間関係と信頼の構造とその転換を検討することにある。

本書の基本的な議論としては、三つの大きなポイントがある。第一に、バブル経済崩壊以降の日本的企業間関係の大きな転換である。国内的な経済変動だけではなく、国際競争からの圧力のために、「選択と集中」や脱系列化、グローバル企業化が進み、それらを通じて、特性は大きく変化してきている。個人的な感慨としても、もはや企業経営に関する国際的な学会に於いても、「ケイレツ」の独自性や優位性に関する国際的な関心や議論は少ない。日本的企業間関係は、強結合で凝集的な人的ネットワークを基盤にしていたが、このような国際的に新たな企業間関係の原理の台頭に対して新たな再編を行い適応しようとしている。この中で日本企業の協力企業との関係再編の取り組みは、トヨタと日産のように、まさに企業系列毎に異なっており、「ネットワーク個別的な」動きを見せている。これは、もはや日本的企業間関係と一括りにして論ずることの限界を示しているようであった。第二には、社会ネットワーク、社会関係資本（social capital）という新たな概念と視点が、急速に国際的に発達し現代の企業や企業間関係、市場社会の変動

を、グローバルな水準から、ミクロな水準まで、まさに重層的に「ネットワーク」した体系で捉えつつある。理論的には、社会ネットワーク分析とそれをコアにする新しい経済社会学が大きく発達し、市場社会での政府、企業、個人の動きとその構造を分析するようになってきたことである。ネットワークには、市場社会の流動的でダイナミックな構造変動を捉える概念の持つ魅力が感じられる。第三には、近年の信頼に関する社会科学的な議論が隆盛してきているけれども、荒井一博の言うように、そこには組織が信頼の構築に果たす役割を重視しない「組織論の欠如」問題が見られる。確かに、地域社会、市場社会そして国際社会の近年の急速な変化は、それぞれの社会に固有の信頼感を大きく動揺させてきている。しかし、個人は属している組織という社会ネットワークで流通している情報、知識、価値観に基づき、取引相手についての信頼を認知する。つまり経済的な取引関係に於いても、社会ネットワークのあり方が個人や組織の信頼の内実に影響することを重視している。

本書は、日本の企業間関係とそこでの信頼のあり方について、組織間での社会ネットワークの構造特性とその変化が影響することを考察する。そのために、社会ネットワーク論とそれを基盤にする新しい経済社会学の観点こそが、社会ネットワークの構造特性の影響の検討を通じて、個人と組織の経済的取引のあり方とそこでの信頼関係の質が異なっていることを明らかにする。そしてネットワーク論的視点からは、いわゆる日本的企業間関係は、強結合で凝集的な人的ネットワークを持ってガバナンスされてきたことを実証的に検討した。だが、そうした特徴が、情報化、系列の国際移転や再編、国際化、戦略的提携導入の動きと直面することで、変化しつつある。つまり日本的な企業間関係は、それを支える人的ネットワークの変動を通じて、長期的で包括的な信頼関係から、短期的、目的限定なものへと変化しつつあると考えられる。これを今後も検討したい。

出版案内

『情報化社会における中央銀行』
情報集合の誤認という視点から

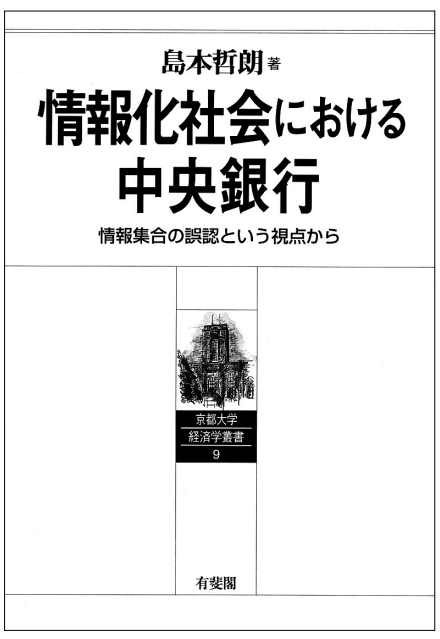
有斐閣　二〇〇七年

京都大学大学院経済学研究科　准教授
島本哲朗

本書は、経済の情報化がもたらし得るマクロ経済的帰結について論じた第Ⅰ部と情報化社会における中央銀行の政策のあり方について論じた第Ⅱ部からなる。以下本書の内容の一部を簡単に紹介するが、混乱を避けるために最初に述べられるべき事柄として、まず、本書（及び本稿）における情報化（社会）とは、「経済に加わる外生的ショックの大きさに関して従来より多くのより正確な情報が入手できるようになること（社会）」を、より平易には、「その時々の経済状況に関して従来より多くのより正確な情報が入手できるようになること（社会）」を指す。また、副題中の「情報集合の誤認」とは、中央銀行や民間部門といった経済主体が「他の経済主体の情報集合（具体的には、他の経済主体が外生的ショックの大きさについて今どのような情報を持つのか）を正確に把握できない」という現象を指す。

明らかだが重要なことに、「情報集合の誤認」は、情報化社会のみならず、経済主体の情報集合が変化し得るあらゆる経済において（つまり、実質的にどんな経済においても）起き得る現象であろう。にもかかわらず、マクロ経済学者によってこの普遍的現象が持つ意義が問われたことはこれまでなかった。本書の分析は、まさにそうした意義を明らかにすることを目指してなされているとも見なされ得る。（ちなみに、この観点から言えば、本書の分析結果の妥当性は、上述された本書の「情報化（社会）」の定義の妥当性には依存しない。）

本書の分析は、マクロ経済学の標準的テキストにおいて必ず言及されるマクロ合理的期待形成学派のモデルを援用して実行されている。ここで、「短期の産出量変動の究極の要因は、外生的ショックの大きさに関して経済主体が不完全な情報しか持たないことにある」という同学派の主張を想起しさえすれば、従来通り「情報集合の誤認」の可能性を考慮することなく実行される場合の同学派のモデル分析から「情報化が産出量の分散の減少（以下、経済的成果の改善）をもたらす」という（情報化がもたらし得るマクロ経済的帰結に関する）単純な結果が得られることは直観的に理解され得るであろう。



では、「情報集合の誤認」の存在を考慮して同学派のモデル分析が実行される場合にもやはり同じ結果が示され得るのであろうか。この問題を扱う第Ⅰ部の分析結果は、そうではないことを明確に示す。実際、第一章では「情報集合の誤認のせいで、情報化が経済的成果の悪化さえもたらし得る」ことを示す劇的な事例が提示される一方、第二章では「情報集合の誤認のおかげで、情報化によってもたらされる経済的成果の改善の度合いがむしろ大きくなる場合がある」ことを示す事例が提示される。（なお、第二章の分析結果は、従来指摘されたことがない「産出量の分散の最小化を目指す中央銀行がマネーサプライルを公表しない場合」の存在を示すものでもある。）

第Ⅱ部の分析結果は、従来の分析において無視されていた「情報集合の誤認」の可能性を考慮することが中央銀行の政策のあり方に関しても新たな知見をもたらすことを示す。具体的には、第Ⅱ部では、産出量の分散の最小化を目指す中央銀行が民間部門がまだ入手していない可能性がある外生的ショックの大きさに関する情報を入手する場合においてその情報をマネーサプライの調整に用いる（裁量政策を採用する）より民間部門に公開する（情報公開政策を採用する）方が望ましい状況と裁量政策と情報公開政策を同時に採用することが望ましい状況が指摘されるが、これらのような「情報公開政策の採用が不可欠である状況」が存在することを指摘したマクロ経済学の文献は（意外にも?）これまでは存在しなかったのである。

退任教員の紹介

平成十九年三月三十一日　定年退職

経済学研究科・経済学部教授

上　總　康　行

一九七七年三月　立命館大学大学院経営学研究科　博士課程
一九九一年三月　京都大学経済学博士の学位取得
一九九五年四月　京都大学経済学部　助教授
一九九六年四月　京都大学経済学部　教授
一九九七年四月　京都大学大学院経済学研究科　教授

橘　木　俊　詔

一九七三年十一月　ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程
一九九九年五月　京都大学経済学博士の学位取得
一九七九年四月　京都大学経済研究所　助教授
一九八六年四月　京都大学経済研究所　教授
二〇〇三年四月　京都大学大学院経済学研究科・経済学部　教授

各支部からの便り

東京支部

東京支部の第十七回総会が三月六日（火）夕刻、東京會舘ロイヤルルームで開催された。出席者は同伴者も合わせて二〇〇名、森棟学部長以下八名の先生にもご出席頂いた。いつもの様に賑やかでなごやかな総会だった。

今回はスナップ写真を中心に、総会の内容をご紹介したい。

（これらの写真は、東京支部のホームページhttp://www.busi-tem.jp/kyoto/でご覧いただけます。）

①受付コーナー準備

年次グループ別にネームプレートを並べている。常任理事のほか〈紅〉は数社の秘書の方にご支援頂いている。

②京大グッズコーナー準備

三回目で毎回十二～十五万円の売上。生協パンフから売れそうなものを選んで送ってもらう。最後には押売り（？）的になるが完売している。（エプロンに注目!!）

③新卒者自己紹介

無料招待している。少しずつ増えてきてうれしい限り。

④柳生流演技

女流歴史作家、多田容子さん（H五年卒）二度目の出演。（白い棒は刀のつもりです。）

⑤講師と演奏家

（右） 野村総研理事長村上輝康氏（S四十三年卒）演題「IT革命は続く―ユビキタスネットワーク化の現状―」

（左） バイオリン奏者松尾依里佳さん（H十九年卒）最後の「琵琶湖周航歌」にもつきあってもらう。

⑥先生方

森棟学部長からご紹介頂いているところ。

⑦パーティ

いつもこういう感じ。年々アルコール（主としてワイン）が増えている。（お元気で何よりです!!）

年三回開催している経済懇話会は、九月二十九日の会で第二十回となる。

経済学部の諸先生、同窓会本部のご支援に心からお礼を申し上げたい。

（合田　隆年（昭三十五卒））

大阪支部

一、理事・幹事会

平成十九年一月二十六日（金）に、毎年恒例の理事・幹事会が、大阪市内のガスビルにおいて開催された。今回は例年とちがい、大阪支部総会・懇親会と同日に開催された。河合支部長、来賓の森棟公夫京都大学経済学部同窓会理事長・経済学部長から挨拶があり、同窓会活動の状況、収支決算、役員人事等が審議された。

特に大阪支部の同窓会活動の活性化に、理事・幹事が協力して行くことを話し合った。

二、第十六回大阪支部総会・懇親会

平成十九年一月二十六日（金）に、第十六回大阪支部の総会・講演会・懇親会が大阪市内のガスビルホール・食堂にて、百十六名の同窓会員の出席のもとに、盛大に開催された。冒頭河合支部長から以下の挨拶があった。

「大阪支部長を前任の辻井昭雄様（昭三一年卒、近畿日本鉄道会長）から引き継いで、無事二回目の総会を迎えることになりましたが、昨年十一月二十五日（土）の京都大学経済学部同窓会理事会・総会において、辻井新会長が誕生しました。大阪支部の同窓会活動をさらに盛り上げて、本部・支部の連携を強化していきたい。」

その後、森棟公夫大学院経済学研究科長・経済学部長および同窓会理事長から、ご来賓の先生方をご紹介頂き、京都大学の近況や経済学部の活動を詳細にご説明頂いた。

第二部の記念講演として、京都大学経営管理大学院長の吉田和男教授から「日本経済の未来とビジネス教育」という興味深い論題で講演をいただいた。京都大学において、昨年開校されたビジネススクールは、参加者の大多数を占めるビジネスマンにとって、大いに参考になった。

第三部の懇親会では、吉村昭道様（昭四一年卒）の名司会のもとに、冒頭河合支部長の挨拶があり乾杯で幕を明け、来賓の教授からも挨拶を頂く等、活発に懇親を深めた。

特に、アトラクションとして、経済学部在校生の松尾依里佳さんのバイオリン演奏は出席の先輩諸氏に、感動を与えるものであった。

三、事務局

・場所
大和ハウス工業株式会社
秘書室気付

・住所
〒五三〇―八二四一
大阪市北区梅田三丁目三番五号

・電話番号
〇六―六三四二―一五一五

・FAX
〇六―六三四二―一五一六

・メールアドレス
a.fujimura@daiwahouse.jp

（河合　司二（昭三十九卒））

神戸支部（神戸同好クラブ）

神戸支部は、一九六一年「神戸同好クラブ」として発足して以来、ずっと継続して懇親会を重ね、その間一九九五年には阪神・淡路大震災などもありましたが、引き続き、会合は重ねてきました。しかし、在来の大企業も本社機能の東京移転や震災の影響やバブル・デフレの影響などによる神戸勤務者の減少などもあって、毎年の出席者はやや減少気味です。現在、支部対象者一〇〇名余の名簿をリストアップし、出席の意向なしと回答あった方は別として毎年案内しております。二〇〇七年度も秋に懇親会を開催する予定です。

（板東　慧（昭三十二卒））

愛媛支部

昨年十一月三日の、京大全学同窓会の発足に向けて、九月三十日、本部より尾池総長他出席のもと、愛媛同窓会（全学）設立期成会が松山市にて持たれ、参加一一〇余名の内、当支部からは、一〇名が参加した。今後毎年一回総会がある予定で、当支部としても積極的に取り組むつもりである。

愛媛支部は、会員数四〇名そこそこの、小粒な組織であるが、当地出身・在住の方、また過去に当地に在住し今は他県に移られている方の遠路参加などもあり、また法学部など他学部からのオブ参加もあり、ここ五〇年間途切れることなく、元気に活動を続けている。

支部総会（懇親会）は年二回を恒例とし、本部からの出席をいただくと共に、会員のどなたかに、時宜にあったテーマで、三〇分ほどレクチャーをお願いして相互啓発に努めている。支部年会費は三千円、別に総会（懇親会）出席者の実費負担（五千円程度）により運営している。

昨年度下期総会（懇親会）

平成十九年一月十三日（土）午後五時より、伊予銀行松山保養所にて。出席は十五名。本部より参加いただいた森棟公夫経済学部長の、大学・同窓会の現況などのお話、松山大学吉田健三助教授の「アメリカの企業年金研究」のレクチャー。旬のふぐ料理とひれ酒で宴は八時まで大いに盛り上がって散会。有志の二次会もありました。

例年六月開催の上期総会は、本年は七月二十一日の予定にて、報告は次の機会にさせていただきます。

（渡部晃夫（昭三十一卒））

九州北部支部

1. 会員数

一八〇名程度

（地元企業・地方自治体等への就職者を中心に、東京・大阪に本社を置く企業の九州北部地区勤務者等により構成。）

2. 役員氏名

今年度の総会にて、新たに三名が理事に選任された。

支部長：鎌田　迪貞（昭和三十三年卒　九州電力㈱代表取締役会長）

理　事：黒瀬　和男（昭和三十年卒　西日本総合ドリンク㈱取締役社長）

〃（新任）：橋本　剛（昭和四十三年卒　国立法人九州工業大学　理事・副学長）

〃：藤永　憲一（昭和四十八年卒　九州電力㈱経営企画室長）

〃（新任）：薬真寺　偉臣（昭和五十一年卒　九州電力㈱経営考査室　次長）

〃（新任）：花田　恭一（昭和五十三年卒　西日本鉄道㈱部長待遇・㈱福岡スポーツセンター出向）

3. 総会・懇親会

・例年五月に年一回の総会・懇親会を開催しており、今年度は五月二十四日（木）にホテルニューオータニ博多において、初参加の二名とオブザーバー参加の法学部卒一名を含め、二十五名が出席した。

・総会では、鎌田支部長からの挨拶の後、藤永理事から理事の増員について提案があり全会一致で承認された。引き続き、ゲスト参加いただいた森棟公夫学部長から、大学のパンフレットにより大学ならびに経済学部の近況などをご紹介いただいた。

・その後は、恒例となっている参加者全員による自己紹介を行った。一年ぶりの再会となったメンバーは、学生時代の思い出や京都への思いのほか最近取り組んでいる仕事のことなど近況を報告しあい、世代を超えて懇親を深めた。

・また、昭和二十一年卒の秀村選三さんが江戸末期の農村研究成果である著書「幕末期薩摩藩の農業と社会～大隅国高山郷士守屋家をめぐって～」により、二〇〇七年度の日本学士院賞を受賞されたことが事務局から紹介され、出席者一同は盛大な拍手でその功績を称えた。

・例年、総会には第二次世界大戦を体験された世代も元気に参加され、自己紹介で自らの戦争体験を披露されることがあるが、今回は、京都大学の学生であった沖縄特攻学徒兵・林市造氏の二十三年の短い生涯を辿った「母への遺書～沖縄特攻　林市造」（多田茂治著、弦書房・二〇〇七年四月新刊）の紹介があった。

4. 役員会

・適宜、役員会・懇親会を開催して、大学や同窓会本部の状況などについて情報交換を行っている。

九州北部支部総会

5. その他

・同窓会本部のご協力により、同窓生名簿を毎年提供いただいていることもあり、総会・懇親会への出席者が着実に増加している。また、最近では、三十歳前後の若い世代で年に数回懇親会を開催するなど、同窓生同士の交流も活発化してきている。

・今後も、同窓会本部と連携を図り、同窓会の発展を努めたい。

※　九州北部支部連絡先
・九州電力株式会社　経営企画室
・〒八一〇―八七二〇
福岡市中央区渡辺通二丁目一番八二号
・☎〇九二―七二六―一五七七
FAX〇九二―七三三―一四三五
・メールアドレス
takehiro_tanaka@kyuden.co.jp
（田中　剛弘（平三卒））

九州南部支部

九州南部支部（熊本・宮崎・鹿児島の三県から構成）の現在の会員数は約六十数名（他学部OBも含む）。年に一回、支部同窓会を開催している。

今年度は平成十九年七月二十一日（土）、宮崎市内のホテルメリージュにおいて、第十一回九州南部支部総会を開催しました。同窓会事務局本部から経営管理大学院経済学研究科教授徳賀芳弘氏、宮崎市長　津村重光氏（京都大学法学部　昭和四十六年卒）をお迎えし、同窓生十一名が出席して、大いに盛り上がりました。

詳細については次のとおり。

会に先立ち、前支部長で本支部設立（平成九年設立）にご尽力いただいた、菱山　泉氏（昭和二十四年卒、九州南部支部顧問）が平成十九年二月十七日に逝去されたことの報告があり、そのご冥福をお祈りし、黙祷を捧げた。その後、瀬地山　敏支部長からの挨拶に引き続き、総会及び懇親会が行われた。

一. 総　会

▽確認事項

①支部総会の開催について、②役員について、③支部活動援助費について、④会費について、⑤平成十八年度収支について、⑥次年度の支部総会開催地についての確認、並びに報告が行われた。

▽役員（理事・幹事）については次のとおり。

平成十九年度の役員は昨年度に引き続き、熊本県理事林田素行氏（昭和四十四年卒、林田公認会計士事務所所長）、宮崎県理事　岡野　徹氏（昭和三十八年卒、旭有機材工業㈱代表取締役社長）、鹿児島県理事　丸元貞夫氏（昭和三十八年卒、阪東機工㈱取締役社長）、会計監事小田原雄蔵氏（昭和二十九年卒、㈱小田原商店取締役）が選任され、満場一致で承認された。

▽京都大学現況報告

京都大学の現況について、経営管理大学院経済学研究科教授　徳賀芳弘氏から報告があった。

二. 講話

宮崎県　宮崎市長　津村重光氏が「宮崎市の取組み～都市間競争に勝ち抜くために～」と題して、主に①少子高齢化問題、

②行財政改革、③行政サービス（子育て支援、高齢者福祉、教育、住宅・インフラ、公共料金等）、④中心市街地活性化について、これまでの取組みとその展望について、クイズを交え、終始和やかな雰囲気でご講話を頂戴した。

三、懇親会

講話終了後、懇親会を開催した。出席者最年長の土居吉郎氏（昭和十六年卒）の乾杯により開宴、懇親を深め、終始和やかな雰囲気の中、盛会裏に閉会となった。

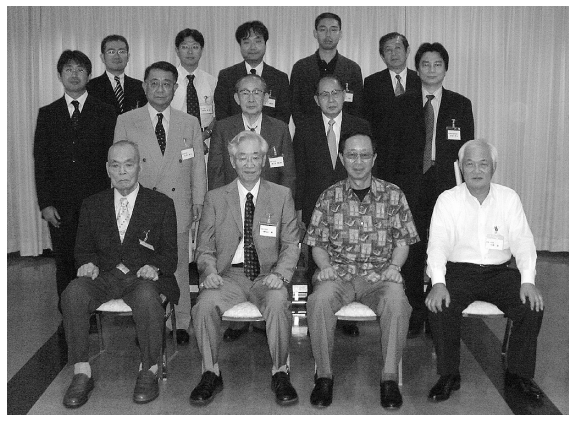
四、その他

海江田順三郎氏（昭和二十八年卒　高島屋開発㈱代表取締役社長）から、京都大学防災研究所桜島火山活動研究センターの専任教授が、平成十九年度から不在となっていることについて説明があった。このことで、鹿児島県知事並びに鹿児島市長は、専任のセンター長（教授）が長期間不在になることは、桜島火山の防災対策上、極めて深刻な状況になると考え、これまでと同様、同センターへ専任のセンター長を配置して欲しいとの要望が行なわれていることについて報告があった。

五、次年度開催地

平成二十年度総会（第十二回）は、鹿児島県において開催される。

（大里和博（鹿児島国際大学））



九州南部支部総会

半世紀を経て再会――卒業五十周年記念同窓会

（昭和三十二年卒）

片岡正彦（昭和三十二卒）

われわれ昭和三十二年卒業組は、今年卒業五十周年を迎えました。ほとんどが社会の第一線を退き人生も晩年に入って、青春の一時を共に学び、共に遊んだアイツたちともう一度一堂に会し語り合おうではないかという機運が盛り上がり、平成十九年五月十六日（水）、時計台記念館国際交流ホールにて、記念同窓会を開催しました。これが最後の同窓会になるだろうと案内状（二百三人に案内）に記したからでしょうか、予想をはるかに上回る百一人（同伴夫人八名を含む）が全国から（アメリカからも）集まりました。

同窓会は二部構成で、第一部は京大本部構内見学、第二部はパーティ形式による懇親会にて行いました。

第一部は多人数のため二組に分けて、時計台記念館内百周年記念ホール、歴史展示室、レストラン・ラ・トゥールなどの諸施設を見学、経済学部図書室にてアダム・スミス、マルサス、マルクスなどの初版貴重本の説明を受けました。またレストラン・カンフォーラ、ノーベル賞の館、附属図書館、総合博物館など時計台周辺を案内しました。当然のことながら五十年前とは様変わりですが、学生時代の面影を残す建物もかなりあり、皆さん感慨深げでした。

その後、時計台前広場にて、記念集合写真の撮影を行い、第二部の懇親会に入りました。

懇親会は、司会からの同窓会を開催するに至った経緯に始まり、物故者への黙祷（逝去者四十五人）、森棟公夫経済学部長より、祝辞と最近の経済学部の状況説明をいただきました。乾杯の後、懇談に移りました。お酒がまわるにつれ、学生時代に戻り無礼講となり、声高に談笑する親しい仲間の輪がたくさんできました。クラス別やゼミ別の写真撮影、三組全員による合唱、フルート演奏など、特別の余興は準備していなかったのですが、芸達者の披露がたくさんありました。宴も終わりに近づき、全員肩を組んで逍遥の歌、琵琶湖周航の歌の大合唱で締めくくりました。スナップ写真を見ていますと、皆さんのなんとも言えない笑顔、笑顔が印象的です。

その後は、それぞれのグループで二次会へ移行、翌日は恒例の東西交流碁会への参加、ゴルフコンペ、奈良への小旅行、初夏の京都の散策などで楽しまれたようです。

最後になりましたが、ご多忙の中、最後までお付き合いいただいた森棟学部長、名簿づくりなどの準備段階から当日までいろいろご面倒をおかけしました櫻田忠衛先生、受付・会計・写真撮影などをお引き受け願った担当の方々、開催まで一年に亘る準備に注力いただいた世話人の皆さんに紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

卒業50周年記念同窓会（昭和32年卒）

経済学研究科・経営管理大学院の寄附講座の紹介

【経済学研究科】

●講座名

「金融・証券システム（大和証券グループ）寄附講座」

寄附者

株式会社大和証券グループ本社

設置期間

平成十八年四月一日～

平成二十一年三月三十一日

教育研究目的・内容

本寄附講座は、日本経済の国際競争力を確固たるものにするために、金融工学の立場から、産業新生をめざした経済の構造改革に取り組むための具体的な方法を研究することを目的として設置する。特に、以下の二点を主たる研究課題とする。

第一の研究課題は「金融機関のリスク管理」である。特に、債務者が特定業種等に偏在することによって生じる集中リスクの管理に関連する研究、および「新バーゼル合意を受けた新しい自己資本比率規制」に関する提言を行う。

第二の課題は「非完備市場における価格付け」である。非完備市場においては総意を得られた価格評価式が未だ存在しないのが現状であり、実務レベルで利用可能な価格式の導出を目標とする。

以上、本寄附講座は、非完備市場における資産の価格評価メカニズムを明らかにするとともに、それに基づく資産運用とリスク管理の開発を目指すものである。

投資信託、不動産、特許などの無形資産を想定しているが、これらの資産の取引市場は、明らかに非完備である。本寄附講座は、金融・証券システム講座の名のもとに、非完備市場における資産の価格評価メカニズムを明らかにするとともに、それに基づく資産運用とリスク管理の開発を目指す。

【経営管理大学院】

●講座名

「みずほ証券寄附講座（企業金融）」

寄附者

みずほ証券株式会社

設置期間

平成十七年四月一日～

平成二十年三月三十一日

（平成十八年四月一日より経営管理大学院へ移行）

教育研究目的・内容

みずほ証券寄附講座（企業金融）では、日本経済が近年経験してきた金融機関の構造的な問題と産業企業の長期低迷の実態をふまえて今後の日本経済の再生と発展をめざした基本的な改革に取り組むための具体的な方法およびその意思決定支援の方法を広く経営学と経済学の手法を用いて研究し、その成果を大学院ならびに学部での教育に反映させています。

さらに、みずほ証券寄附講座

（企業金融）では、企業金融および関連する経営戦略、企業統治、金融工学といった分野における若手研究者を積極的に支援することを寄附講義の目的の一つとして、日本人、外国人を問わず、有能な若手研究者を特任研究員として採用し、理論的あるいは実証的な研究をさまざまな手段で援助しており、とくに、これらの若手研究者と教員との共同研究を奨励して、将来の当該分野における国際的な研究者を育成することを目指しています。

●講座名
「三菱UFJキャピタル　寄附講座」
寄附者
三菱UFJキャピタル株式会社
設置時期
平成十七年四月一日～
平成二十一年三月三十一日
（平成十八年四月一日より経営管理大学院へ移行）
教育研究目的・内容
ベンチャーキャピタル及びプライベートエクイティとそれに関連する分野の高度な研究、その実務への応用研究、及び関連業界で活躍できる人材の教育を促進すること。企業金融とそれに関連する分野の高度な研究と、その実務への応用、及び関連業界で活躍できる人材の教育を促進すること。

●講座名
「京セラ経営哲学寄附講座」
寄附者
京セラ株式会社
設置期間
平成十九年四月一日～
平成二十二年三月三十一日
教育研究目的・内容
経営哲学の体系化を行う。この時に哲学との連携が計画されている。具体的には哲学の専門訓練を受けた非常勤の研究員を経営哲学・情報倫理・環境倫理の三領域で募集する。哲学での応用倫理の領域を企業経営の具体的場面に適用した理論の開発を試みることになる。アメーバ経営と経営哲学研究会も予定している。
教育に関しては、基本的には、経営管理専門職大学院学生を教育することが中心となる。経営管理専門職大学院は、高度な専門性を持つ実務家教育を目的とし、実際に企業経営を行う人材を養成することも想定している。このような学生に対して、企業倫理や経営哲学を教えることは、事業を行うことの社会的な意味づけや事業についての倫理の体系を教えることを目的とする。
平成十九年度前期には高客員教授の「企業倫理とコンプライアンス」が開講され、後期は日置担当教授の「経営哲学」が経済学研究科学生に対して、開講される。平成二十年度以降に学部学生を対象とする講義も計画している。さらに、非常勤講師による関連科目も計画している。また、一般市民や企業関係者に対して、研究成果を報告するシンポジウムや講演会なども予定している。

●講座名
「関西経済経営論（関西アーバン銀行）寄附講座」
寄附者
株式会社関西アーバン銀行
設置時期
平成十九年四月一日～
平成二十二年三月三十一日
教育研究目的・内容
関西の企業経営や新企業・新産業を理論的かつ体系的に考察し、関西経済論を学問として構築します。
その研究成果に基づいて、地域経済の発展を担う企業・NPO・行政などの高度な指導者養成に必要な知識と教育プログラムを開発します。また、関西におけるベンチャー創生の環境つくりとその担い手育成など、この地域に固有課題の発見と施策体系の構築に努めます。本講座の最終的な研究課題は、経済学が本来目指していること、すなわち都市地域を単位とする経済・社会の発展を構造的に理解する学問体系の構築です。

●講義名
「先端バンキング論寄附講義」
寄附者
株式会社みずほフィナンシャルグループ
設置期間
平成十九年度～
平成二十一年度
教育研究目的・内容
寄附講義の目的は金融最先端実務に関する人材の養成であるこのためになされる講義の内容を本学学部および大学院授業計画より抜粋すれば以下の通り。バブル崩壊後、わが国の金融機関、特に銀行部門は、不良債権処理を最大の経営課題とし、その処理過程で従来のビジネスモデルの見直しを進めた。すなわち、伝統的な間接金融に著しく偏る企業の資金調達構造を、間接金融以外の手段も並立する構造へ変革していく動きである。本講義ではこのような近年の企業金融の変遷を踏まえ、間接金融と直接金融の中間形とも言える市場型間接金融の概論を講義の導入とし、その後、銀行部門が提供する最先端の手法を具体的事例も交えながら、その意義と経済効果および今後の発展性を考察していく。考察する金融の手法は、シンジケートローン・ローントレーディングの領域と広義のストラクチャードファイナンスの領域に大別される。換言すると、前者が金融機関のローン債権のオフバランスであり後者は企業の資産のオフバランスである。このように、本講義の目的は、銀行部門のダイナミックな今日的ビジネスモデルを伝えることにある。なお、本講義は、みずほフィナンシャルグループ各社で第一線の実務を担う役職員がゲストスピーカーとして参加する。
こうした講義に加え、寄附講義の資金を用いて、本年度四月に京都大学CSR・コンプライアンス研究会が立ち上げられ、五月十七日に早くも第一回のシンポジウムが開催された。

北京日中ワークショップ：大学院生を参加させて開催

経済学研究科・経済学部教授　八木紀一郎

三月十一～十三日に北京の中国人民大学経済学院で、日中共同ワークショップ「経済発展過程におけるガバナンス問題」を開催しました。中国人民大学は、中国における社会科学の研究・教育の重点大学で、わが経済学研究科はその経済学院と交流協定を二〇〇三年に締結しています。
このワークショップは、教員だけの学術交流に限定せず、大学院教育の高度化・国際化という目的と結びつけて実施されました。そのため、使用言語を英語として博士後期課程に在籍する大学院生の応募を募り、選考のうえ九名を参加させました。教員の参加者は四名（森棟研究科長、下谷、植田の両教授に筆者）です。人民大学の側でも、五教員のほか約二十名の大学院生ほかの若手研究者が参加しました。

中国人民大学から客員教授の称号を受ける森棟研究科長

「ガバナンス」とは、システムを構成する多数の要素あるいは主体を規律づけながらシステム全体の機能を発揮させる仕組みのことです。経済学者にとっては、企業のガバナンス（コーポレート・ガバナンス）がなじみのある問題ですが、最近では政治学や政策理論の領域でより一般的な意味で用いられています。今回のワークショップでとりあげられたトピックは、国際貿易・金融システムから国内の企業・金融・技術システムと、国内格差・貧困・環境問題、さらにそれらを位置づけ分析するための理論・思想と多岐にわたりましたが、ガバナンスという視点が入ることによってまとまりが生まれていたと筆者には思われます。とくに中国側の報告では、中国の国際経済システムへの参入と国内制度の整備の双方において、実効性のあるガバナンスが模索されていました。しかし、他方で、地域ごとの差異を無視して中国経済を論じることの危険も指摘されました。
東アジアの経済統合という問題は、現在焦眉の課題として浮上しています。わが経済学研究科も、研究と教育の双方において、国際的連携のもとにそれに取り組まなければならないでしょう。今回の北京ワークショップは、その第一歩だったのではないかと思います。

北京日中ワークショップの参加者